様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３３４０３
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６７０４

研究課題名（和文）近代日本における児童雑誌と子どものリテラシー形成

研究課題名（英文）A study of the Formation of Youth Literacy and Children's Magazines for youth in Early-Modern Japan

研究代表者
柿本　真代（KAKIMOTO, MAYO）

仁愛大学・人間生活学部・講師

研究者番号：４０７５９０８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は明治期に数多く創刊された少年少女向けの雑誌が読者にどのように読まれたのか、またリテラシー形成とどのように関わってきたのかを、雑誌本体への書き入れや日記などの非活字史料から明らかにすることを目的としたものである。『少年園』や『小国民』に遺された書き入れや少年の日記を調査した結果、雑誌の記事に共感的なものや好意的なものが中心であったが、中には「悪文」などと批判するものや内容を「少年にふさわしくない」とするものも見られ、投稿文などにはみられない読書反応を明らかにすることが可能になった。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify reading practices of young readers in the Meiji era through an analysis of marginalia in youths' magazines and diaries. I investigated marginalia in "Sho-nen-en" and "Sho-koku-min". As a result of that investigation, the fact that there were not only favorable comments but also some critical opinions were exists was revealed.

研究分野：児童文学史

キーワード：児童雑誌　リテラシー　読み書き　書き入れ　日記

１．研究開始当初の背景

明治の子どもたちが何を読み、どのように書いてきたのかについては、従来多くの研究がなされてきた。既存の研究の多くは前田愛『近代読者の成立』有精堂、1972 に代表されるように児童雑誌の作文や投書を分析するという手法、もしくは加藤理『駄菓子屋・読み物と子どもの近代』青弓社、2000 などのように著名人の回想を元に読書体験を復元するという手法をとってきた。

しかし、これらの手法では教員による添削や編集者による修正の可能性を考慮できない点や、著名人という特殊な例に限定されてしまう点に課題が残されてきた。そこで本研究で活用するのは、雑誌本体に遺された書き入れである。

申請者はこれまで『ちゑのあけぼの』（1887－1889）をはじめとした児童雑誌の研究を行ってきた。これらの雑誌は復刻版などが出版されていないため、全国の図書館・博物館・旧家・古書店などに点在する雑誌本体にできる限り目を通してきたが、その過程で雑誌には極めて多様な書き入れがあることを発見した。

『ちゑのあけぼの』および『少年園』（1888－1895）について予備調査を行ったところ、雑誌本体には、持ち主の学校・名前のほか、記事に対する感想や雑誌に対する思いなど、様々な感情が表出していることが明らかになった。こうした書き入れは、児童雑誌に投稿された投書や作文とは違い、教員の添削や編集者による修正が行われていないため、持ち主であった子どもたちの生の声がそのまま反映されているという点において、極めて貴重な一次史料である。

従来書き入れについては、柳田国男など著名人の蔵書を中心に調査が行われてきた（「柳田国男の書き入れ考(1)：大藤ゆき『児やらひ』」『時の扉：東京学芸大学大学院伝承文学研究レポート』6、2000.3 など）が、有山輝雄は著名人のみを研究対象とするのではなく「下からのメディア史」（『メディア史研究』Vol.33、2013.3）の重要性を指摘している。すなわちあるメディアの影響を考えるためには、そこに掲載された投書のみに着目するのではなく、「ふつうの人々」の日常生活の中に視座を置くことによって日々の生活の中におけるメディアの役割を検討する必要性を論じたものである。

そこで本研究ではこうしたふつうの人々が雑誌をどのように読んできたかについて検討するべく、書き入れに加え日記についても史料として扱う。日記もまたもまた子どもの読み書きの実践の総体であり、子どもたちの生活と児童雑誌の役割を知るための重要な史料である。

西川祐子『日記をつづるということ』（吉川弘文館、2009）では、様々な庶民の日記が紹介されているほか、田中祐介らによって故・福田秀一（国文学研究資料館名誉教授、元国際基督教大学教授）が蒐集した日記帳コレクション（以下「福田日記コレクション」と表記）の目録化および国際基督教大学アジア文化研究所にて公開がなされるなど（「近代日本の日記帳」『アジア文化研究』39、2013.3）、近年日記を史料として活用できる環境が整いつつある。

「福田日記コレクション」には、明治 20 年代に書かれた、現在の京都府亀岡市にある高等小学校に通っていた 10 歳の少年の日記（以下「南桑田少年日記」）が収められている。ここには読書の記録に加え雑誌を読んだ感想なども書かれているほか、教員の添削指導のあとも残されている。

従って、「南桑田少年日記」は明治期の少年の生活と読み書き、またそれに対する教員の考え方、ひいては学校教育における子どものリテラシー教育についての方針を知る格好の史料となっている。

さらに日記の内容と南桑田郡（現在の京都府亀岡市）に関する郷土史料や教育関係史料を日記と照らし合わせることで、当時の高等小学生の生活をより克明に描きだすことが可能である。

以上の経緯から、児童雑誌本体への書き入れ調査に加え、子どもの日記の分析を行い、さらにこれらの結果を雑誌の投稿文を用いた従来の研究や子どもの読書に関する研究成果と結び合わせることで、明治期の児童雑誌と子どものリテラシー形成について実証的に明らかにしていくことが可能になると考えた。

２．研究の目的

明治期の子どもたちは児童雑誌を読むことで、何を考えどのように表現してきたのか。数多くの児童雑誌が創刊された明治期において、雑誌が子どもたちに与えた影響を言説分析ではなく、子どもたちの肉筆から実証的に明らかにすることにより、子どものリテラシー形成史に新たな光を当てることが本研究の目的である。具体的な取り組みは、以下の通りである。

（１）児童雑誌本体への書き入れを調査し、書き込みの対象となった記事とその内容を分析することで、子どもたちが児童雑誌をどのように読み、何を考えたのかその傾向を明らかにする。具体的には、1889 年から 1910 年に『小国民』および『少年世界』に書き込まれた内容を集積し、傾向を明らかにすることで、児童雑誌が子どもたちにどのような影響を与えたかを明らかにする。

（２）子どもの日記を翻刻・解読し、生活の中での児童雑誌の役割を分析する。具体的には、「南桑田少年日記」をはじめとした日記史料を郷土史料と照らし合わせ、当時の子どもたちの暮らしを復元するとともに、児童雑誌の入手方法や読書様態を分析する。

（３）上記の個別研究を既存の雑誌研究や子どもの読書研究の成果（今田絵里香『〈少女〉

の社会史』勁草書房、2007）と結び合わせることで、近代日本における児童雑誌と子どものリテラシー形成を複合的に考察する視座を獲得する。

３．研究の方法

（１）書き入れについての調査は、1 年半という限られた期間であることを考慮し、本研究では調査する雑誌を『少年園』（1888－1895）『小国民』（1889－1903、のち『少国民』）『少年世界』（1895－1933）の 3 種に絞った。

調査先は大阪府立中央図書館大阪国際児童文学館、東京大学大学院法学政治学研究科附属法制史料センター明治新聞雑誌文庫、神奈川近代文学館、日本近代文学館、茨城大学図書館の 5 箇所とした。

このように対象の雑誌を定めたのは、『少年園』『小国民』および『少年世界』が「南桑田少年日記」に多く登場する雑誌であること、また発行部数が多く、ひとつの所蔵先に複数存在すること、さらに既存の研究も比較的豊富であることが理由である。

調査先に関してはこれまでの調査を参考に、他の図書館等に比べて書き入れのある史料を多く有する館を選んだ。

本研究では膨大な児童雑誌の閲覧・調査が要となる。調査と取りまとめを効率的に行うため、書き入れの内容については、記事タイトル・雑誌名・年月日・書き入れの内容・所蔵先の 5 項目をフォーマットとし、リスト化した。

（２）日記については、先に挙げた国際基督教大学アジア文化研究所所蔵「福田日記コレクション」から明治期の子どもの日記を、また古書店等から明治期の子どもの休暇日記を収集し、読書に関する記述を抽出する。

「福田日記コレクション」から収集した「南桑田少年日記」では、どのような雑誌を読んでいたかが具体的に書かれているだけでなく、読んだ感想や書林へ買いに行ったこと、教員に本を借りた記録なども記されている。

従って、「南桑田少年日記」は明治期の子どもの暮らしと児童雑誌をはじめとした読み書きの実態を知るための格好の史料である。ただ、ひとつの日記だけでは限定的な例になってしまうため、古書店や公文書館でも収集・調査を行い、入手した他の日記からも児童雑誌に関する情報を収集し、様々な読書実態を比較することで一般化する。

（３）書き入れ調査の結果と日記から明らかになる読書実態、またすでに明らかになっている児童雑誌の投書の分析などを結び合わせることによって、児童雑誌が子どものリテラシー形成に果たした役割を実証的かつ複合的に解明する。

すでに田中卓也「近代少年雑誌における少年読者の共同体形成に関する一考察—『少年世界』・『少年界』読者の比較を通して」『関西教育学会年報』35、2011.8 や土居安子「明治期『少年世界』の読書投書欄から見た『少年世界』の読書様態」『国際児童文学館紀要』26、2013.3 では、『少年世界』の投稿文などを中心に、読者がどのように雑誌を入手し、どのように雑誌を読んでいたか誌面から読み取れる情報については明らかになっている。

こうした既存の研究と書き入れや日記から抽出した読書実態を比較・対照することによって児童雑誌と子どものリテラシー形成の様相を複合的に明らかにすることを目指す。

４．研究成果

（１）前述の 5 箇所の館にて『少年園』『小国民』『少年世界』について調査を行った。結果として書き入れが収集できたのは『少年園』が中心であった。『少年園』の書き入れの中には、雑誌の編集者に対する支持や記事に対する共感が書き入れられたものだけでなく、自分以外の「青年子弟」らにも愛読をすすめるものや「少年園ハ余ガ師ナリ 少年園ハ余ガ父母ナリ」と裏表紙に筆で書きつけたものなど、『少年園』に残された読書の跡からは、青少年の読書に対する欲求と、『少年園』に対する期待のほどが伝わってくるものが多くみられた。一方で、記事に対する批判的なものも少なからず見られた。例えば、特定の記事の上に紙を貼り付け、「この記事は少年にはふさわしくない」としながら、「他の記事は為になるから送る」という年長者から少年におくる際に付されたと思われる手紙である。これは特定の記事のみに対する日批判だが、『小国民』の書き入れの中には「読むに堪えない」や「悪文」という辛辣な書き入れも見出された。

調査を開始する以前は、主な読者対象となっていた尋常・高等小学校から中学校にかけての少年読者による読書反応を収集する目的であった。しかし、結果としては少年たちというよりもむしろ、彼らにその雑誌を与えてよいかどうかを判断するような年長者の読書反応の方が書き入れとして多く残されていることが明らかになった。一定以上のリテラシーを身に付けた人物の声を復元することはできても、やはり年少の読者については難しく、この点は少年少女の日記など異なる史料によって補完していく必要がある。

個々の事例からは、雑誌に対する強い共感だけにとどまらず、時に批判的に、時に辛辣に雑誌を読む読者の姿が浮かび上がった。雑誌の欄外は、編集者に遠慮することなく吐露された感情表現の場でもあったといえる。またそのような書き入れがなされた雑誌が別の誰かの手に渡ることで、「新しい意味と身分を付与」された雑誌へと変化していたのである。

（２）前述の「南桑田少年日記」以外に、古書店にて複数の日記帳を蒐集した。また福井

県文書館等でも少年少女によって書かれた日記帳を閲覧・収集した。その結果、多くの日記は明治末期から大正期に書かれたものであり、明治 20 年代に書かれた「南桑田少年日記」は出版された子ども向けの日記帳としては極めて早い例であることが明らかになった。そこでまず、日記を教材として用いることが日本においてどのように広まり、定着し商品化していったのかの過程を調査し、その上で「南桑田少年日記」を中心に調査を行い、日記指導が実際にはどのように行われていたのかを分析することとした。

結果として、日記は 1880 年代後半に作文修業という観点から教育上の価値が論じられるようになり、やがて家庭教育の必要性に関する議論が高まるにつれ、家庭の様子を知るための手段としても教員に認識されるようになったことが明らかになった。

しかし、少年雑誌でその価値が論じられたり、日清戦争を通して従軍日誌の有用性が伝えられたりすることで、子どもたちは自ら日記を綴り、雑誌に投稿するようになった。さらに日記をつけることは国の歴史に名を遺すこと、ナショナリズムを涵養することとしても論じられることによって、日記が教育手段として定着することになったことが明らかになった。

次に、「南桑田少年日記」について郷土資料を調査した結果、日記の筆者である少年は自身の通っていた教員を父に持っていたことなどが明らかになった。日記が書かれた時期は日清戦争後であり、少年は教員に軍歌集を借りたり、日清戦争の幻燈を見に行ったりということを日記に記したほか、戦争ごっこをしたことを好んで綴っており教員もまたそうした遊びを推奨していた。

教員が評語を書くことで、少年自身もやがて日記に書くべきこと・書いてよいことを自覚するようになっており、少なくともこの日記では、美文を書くことではなく、生徒らしい〈ことば〉、ひいては臣民としての〈ことば〉で自身の行動を語り自己制御できるようになることだったと考えられる。生徒としての規範を理解し、そうした〈ことば〉で綴ることは、生徒の立場からみると、模範生としての自分を教員に印象づけ、友好な関係を築くためのツールとしても機能したと考えられる。

今後は収集した他の日記帳についても同様に検討することで、教員の評語が日記の内容にどのような影響を与えてきたのかを分析しつつ、子どもたちの読書様態についての指導の内容についても検討していく必要がある。

（3）上述の成果を踏まえ、残された課題についても記しておく。（1）について、書き入れを行うことが当時どのように考えられていたのかという問題、すなわち読書の方法に関する考察は十分に行うことができなかった。中野重治の自伝的小説『梨の花』では、主人公が教科書に線を引く様子をみて同級生が先生に怒られるのではないかと心配する場面がある。主人公はこうした読み方を前述の竹貫佳水『読書法』から学んだというが、この例からは子どもが教科書に線を引くことは叱責に値する行為だったことが読み取れる。これは明治末期の教科書についての事例だが、雑誌についての読書法は近代においてどのように教えられてきたのかについても今後検討していく必要がある。

また（2）について、日記帳が教材として定着する過程と「南桑田少年日記」についての分析は行ったものの、他の日記帳について、また日記帳において読書に関する記述や指導などに関する検討は不十分であった。こうした点についても丁寧に検討していくことでテクストの内容にとどまらないより広いスケールで子どものリテラシー形成史を描き出すことが可能になるものと思われる。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 柿本真代「明治期の少年雑誌と読者たち—『少年園』『小国民』の書き入れをめぐって—」『仁愛大学研究紀要人間生活学部篇』8、2017 年 3 月、59－69
http://hdl.handle.net/10461/28495

〔学会発表〕（計 3 件）

① 柿本真代「教育手段としての日記の定着：明治期少年の『日誌』にみる指導と規範」シンポジウム「近代日本の日記文化と自己表象」、2016 年 9 月 17 日、明治学院大学白金キャンパス（東京都・港区）

② 柿本真代「雑誌はいかに読まれたか：『少年園』『小国民』『少年世界』における書き入れをめぐって」日本児童文学学会第 55 回研究大会、2016 年 10 月 30 日、日本女子大学（東京都・文京区）

③ 柿本真代「高美書店資料と少年少女雑誌」近代日本児童出版文化史研究会、2017 年 3 月 12 日、大阪府立中央図書館（大阪府・東大阪市）

〔図書〕（計 1 件）

① 田中祐介編著『近代日本の日記文化と自己表象』笠間書院、2017 刊行予定、400 頁

6．研究組織

（1）研究代表者

柿本真代　（KAKIMOTO, Mayo）
仁愛大学・人間生活学部・講師
研究者番号：40759081